

C.T. Beck 氏の研究から考える 看護における研究と方法

きたる 2011 (平成 23) 年 8 月 7 日 (日), 8 日 (月) の 2 日間, パシフィコ横浜 (神奈川県横浜市) において, 第 37 回一般社団法人日本看護研究学会学術集会が開催される予定となっている。この学術集会では, Cheryl Tatano Beck 博士によるご講演を予定している。Beck 氏は, わが国でも名高い『看護研究—原理と方法 (第 2 版)』(2010, 医学書院)〔原書『Nursing Research : Principles and Methods』(7th ed.), 2004, Lippincott Williams & Wilkins〕の執筆者の 1 人としても著名である。ご講演では, メタ・シンセシスに関するテーマと, 質的研究と量的研究の研究方法に関するテーマの 2 つをお話いただくこととなっている。これを記念し, 本号にて Beck 氏に関連する焦点を組むこととなった。

Beck 氏は, 米国ストーズ市にあるコネティカット大学看護学部産科学・女性学部門の教授である。1990 年代初等から今日にかけて, Beck 氏は膨大な業績をおさめている。中でもとりわけ, 出産後うつ状態, もしくは外傷性出産を体験している女性に関する質的研究が数多いが, 同時に, 出産後うつ状態のチェックリストやスクリーニング尺度の開発もされている。その一方で最近では, 出産後うつ状態に関する研究, 外傷性出産に関する研究それぞれのメタ・アナリシスやメタ・シンセシスも精力的に行なっている。専門領域以外でも, 上述書で同じく執筆者を務める Denise F. Polit 博士とともに, 看護研究方法論に関する論文にも取り組まれており, 質的研究のみならず量的研究の方法論の解説にも積極的である。

このような Beck 氏の業績を鑑み, 本焦点においてはまず, Beck 氏ご自身による論文を, 書き下ろし&再掲の形で 2 本紹介する。そして, Beck 氏の研究からみえてくるものを考えようと, 文献レビューを筆者が行なった。Beck

氏が専門とする産科学・女性学以外に、研究方法の側面からもレビューを行なった。Beck 氏の業績は数多いため、紹介したのはその一端にとどまったが、そこからでも十分に、Beck 氏の研究の概要とその幅広さをうかがい知ることができるだろう。

次に、量的研究と質的研究の研究方法論に関する議論である。ここではまず、わが国における量的研究のエキスパートともいえる高木氏、そして質的研究からは、遠藤氏が、Margaret Newman の理論を中心に据えながら質的研究の現況と今後を示し、さらに木下氏には、グラウンデッド・セオリー・アプローチの多様化を踏まえて、質的研究は研究する人間をエンパワーできるかという大変興味深い論考をまとめていただいた。

産科学・女性学の視点からは、産褥期のうつ病の領域で長年研究されている岡野氏、ならびに母性看護領域を専門とする池田氏・上別府氏にそれぞれ執筆いただいた。

本焦点は、こうした2つの側面を軸としたアプローチをもっている。出産後うつ状態や外傷性出産を体験した女性の研究を行なっている看護研究者や、実際に看護援助を提供している看護実践家に大変興味深い話題を提供することはもちろん、看護研究において常に大きなテーマとなる研究方法論に関する議論は、極めて斬新かつ有益な示唆を多くの看護研究者に与えることだろう。

本焦点を受けて開催される学術集会では、読者の方々が本号を片手に、Beck 氏の声を直接聴いていただけるものと信じている。

企画：黒田裕子(北里大学大学院クリティカルケア看護学教授)